

41 住民による健康増進活動の形成

—長野県八千穂村における実践から

杉山 章子

長野県東南部にある人口約六千の八千穂村は、村ぐるみの健康づくり活動で知られている。一九五九（昭和三四）年に開始された全村健康管理事業は、「予防は治療に勝る」という考えに基づき、全住民に対する健康診断と幅広い健康教育を組み合わせて実施された。

事業開始当初は、この地域で戦後初期から医療活動を展開してきた佐久病院のスタッフが中心となってプログラムを推進した。しかし、健康づくりの当事者である住民の主体的取り組みなしに、実効は期待できない。保健・医療に関する情報が乏しい中で身体を労る余裕もなく厳しい労働に従事してきた住民が、健康増進活動の主体としての力をつけるためには、専門職からの支援が必須となる。

八千穂村では、保健・医療の専門職によって、住民の潜在能力と可能性を引き出して力づける試みが続けられてきた。本報告では、その過程をたどり、地域において、住民主体の保健・医療活動が成立する要件を考察する。

全村健康管理事業は、国民健康保険医療費の窓口徴収反対運動を契機に始まった。運動は成功しなかったが、その中から、病人を作らず健康を守ろうとする動きが現れ、予防に主眼をおいた事業が誕生したのである。

村と佐久病院が連携して事業を立ち上げ、まず、全住民に対する集団検診が開始された。長い間医療と疎遠な環境におかれ、自らの健康を守るという意識が乏しい住民に対して、定期的な受診を促すことは容易ではない。佐久病院の医療スタッフと役場の職員らは、住民の意識を変え、積極的に受診してもらうために、さまざまな方策を講じた。

ひとり一人の健康状態や検診結果などを記録する健康手帳の配布と記入方法の指導、保健・医療の知識を盛り込んだ演劇の上演や講話会による健康教育の実施、検診

の結果をわかりやすく説明する事後報告会と個別相談会の開催など、多様な試みが展開された。

これらの事業を行なうにあたっては、住民の保健・医療に対する知識レベルや、催しに参加しやすい生活時間などについて、細かい配慮がなされた。活動は生活に密着して進められ、個々の家庭の中に分け入る場面も少なくなかった。こうした働きかけが比較的スムーズに受け入れられた要因としては、佐久病院が、それまでの地域医療活動を通じて獲得していた住民からの信頼感が大きい。

集団検診が軌道にのると、早期発見が増えるとともに、潜在疾病や重症者の減少が見られた。また、住民の中に、予防と生活改善のための衛生知識が浸透していき、健康づくりに取り組む態勢は徐々に整っていった。

健康診断や健康教育の実施過程で、病院や役場の関係者とともに活躍したのは、衛生指導員である。住民の中から選ばれ、村の保健・衛生業務にあたる衛生指導員は、検診の広報や実施の際の諸調整、病院や役場による調査への参加などに幅広い活動を繰り広げ、一般住民と

専門職の間で、貴重な働きを見せた。

衛生指導員は、村の生活状況を十分に把握した上で住民に対応し、役場職員や保健師、病院の医師や看護師などの専門職と緊密な連携をとりながら健康づくりを推進した。こうした住民と専門職のパイプ役の存在は、行政や専門機関の主導する事業が一方的になることを防ぎ、活動の定着に大きく寄与した。

一九六〇年代には、一般の住民の中からも食や健康について考えるグループが現れた。こうした動きに対して、専門職が側面から支援を行なった結果、住民が中心となった健康づくりの取り組みは次第に拡大し、現在、多彩な活動が展開されている。

八千穂村における実践では、住民に対する関係機関や専門職の適切な支援と、人々の動きの組織化への工夫が、健康増進活動の進展に大きな役割を果たしていた。ここに示された視点・方法は、患者・利用者主体が強調される現在、地域保健・医療活動を考える上で欠かせない要素と言えよう。